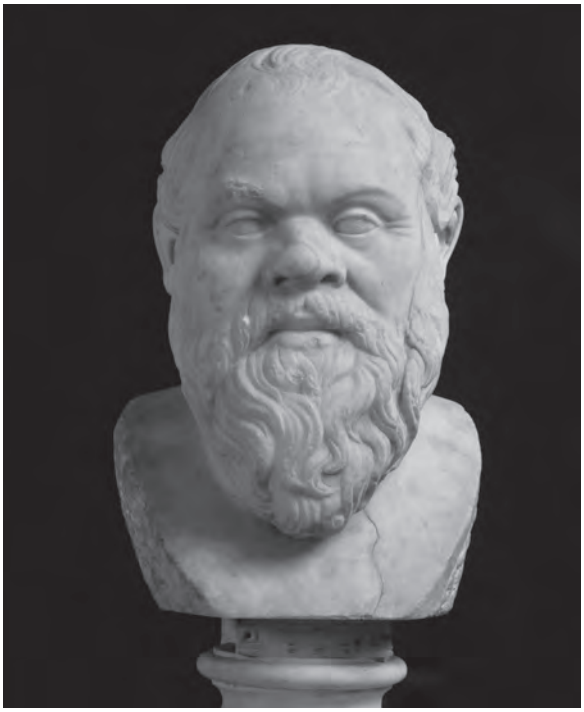
てんかんからみる人物の横顔
～異論異説のてんかん史～

松浦雅人
田崎病院副院長／東京医科歯科大学名誉教授

【第 24 回】
ソクラテスのてんかん説について

ソクラテスは演説ではなく，もっぱら対話にこだわった．相手が考えている事柄を問答によって一つひとつ確認しながら，そのなかで曖昧さや論理的な矛盾を明らかにする．これによって相手は自ら考え，心底から納得するが，時には人々を苛立たせ，憎しみや反感を買ったことも少なくなかったようである．ソクラテスは大きな顔と口，出目，獅子鼻，禿頭と，怪異な風貌であったようである(写真)．



©Bridgeman Image/PSS 通信社
ソクラテス

はじめに

ソクラテス(前 470～399)は，紀元前 399 年に 70 歳で死刑判決を受け，毒杯を仰いで亡くなったということ以外には確実な資料が乏しい．「ソクラテスの弁明」[1]は，ソクラテスにとっては身に覚えのないメトレスらの告発に対して，裁判で語った自らの想いを弟子のプラトン(前 427～347)が刑死からまもない時期に書き記した書物である．それによれば，ソクラテスは「私には何か神と神格に関わりのあるもの(ダイモニオン)が生じるのです…それは子供の時以来私につきまとい，ある種の音声として生じるのです…私がまさに行おうとしていることを私に止めさせようとするのです」とあり，言語性の幻聴があったことを示唆している．また，プラトンが 40 代になってから書いた「饗宴」[2]には，ソクラテスが同じ場所に数時間から一昼夜にわたって立ち尽くしていたというエピソードが書かれている．これらのエピソードから，ソクラテスはてんかんではなかったかという議論がある．

ソクラテスは自らの言行については文書を全く残していない．そこで，プラトンが書いたソクラテスの発言は，本当にソクラテスが語ったことかどうかという問題がある．プラトンはソクラテスを深く敬愛し，ソクラテスが刑死したときは 28 歳で，「ソクラテスを完全なまでに描写し，後世に残し，伝えなければならない」と思い定めていたという[3]．特に「弁明」などの初期

SAMPLE
Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.